入園当初は、子どもたちはひとりひとりバラバラで、それぞれがまだ、幼稚園に毎日くるという意識もはっきりしていないから、先生は大へんである。おやつの時間になると「ナニカチョウダーイ」とお菓子をねだる子どももいるし、幼稚園から家への帰り路になると、お腹がすいて歩けなくなって路ばたに坐りこんでしまう子どももいる。朝になっても「ボク、キョウハ、ヨウチエンニイクノヤメタ」といって、すましている子どももある。どうして毎日幼稚園にいくのかということが実感としてわからないのである。幼稚園の中でも、入園当初はとくに子どものなまの姿があらわれてほほえましい場面がいくつもある。

先生の注意をひきたくて、よその子どもの靴をかくしたり、他の子と遊びたくてもどうしてよいかわからなくて、他の子に抱きついて泣かれたり、困った行動というよりも、その反面には、まだ型にはまらないのびやかさがあり、めんどりの羽の下から出てきたばかりのひよこのような、ほかほか湯気の立ちそうなぬくもりがある。幼稚園の社会生活を中心にしていえば「適応していない」とか「馴れていない」とかいわれるのであるが、内と外を使いわけない子どもの姿そのままがある。

六月、七月となると、子どもも一応幼稚園の生活に馴れてくる。集まったときにも静かにし、列に並んで聞き、坐ってお話をきく。しかし、それとともに、あの幼児のふっくらとした温かみ、にこにこした笑顔、人を疑わない信頼感は損われてはいないだろうか。幼稚園にいったら、と楽しみにして抱いてきた子どもの夢はこわされてはいないだろうか。集団生活に適応させる努力も必要であろうが、それが幼児の生活をいっそう豊かにするものでなければならない。子どもの一人ひとりと手をとって語り、子どもの気持ちに親しく触れてゆくとき、全体としてみるとまとまりがないようにみえても、これから集団が育ってゆく下地が養なわれているのである。

幼児の教育　第六十五巻　第七号

七月号　©　定価八〇円

昭和四十一年六月二十五日　印刷
昭和四十一年七月　一　日　発行

東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真

東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五
印刷所　凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします